

第3章 北アフリカのイスラーム急進派「マグリブ・イスラーム諸国のアル=カーイダ」のウェブ上の声明分析 —マリ紛争に関する声明の翻訳を付して—

若桑 遼

はじめに

本稿は、北アフリカのイスラーム急進派「マグリブ・イスラーム諸国のアル=カーイダ（以下、AQMI と表記）¹」を扱う。現在、サハラ地域の安定を脅かす要因のひとつが、各地のイスラーム急進派の浸透と台頭である。マリ北部を制圧した「アンサール・ディーン」、西アフリカにおけるタウヒードとジハードの運動（MUJAO）、ナイジェリア北部を拠点とする「ボコ・ハラーム」など、人道的見地から国際社会に問題視されるイスラーム系組織・集団は何らかの形でアルジェリア起源の AQMI とかかわりをもっている場合が多い。本稿では、このような点を考慮し、サハラ地域のイスラーム急進派の動向を知る上で手がかりとなる AQMI を取り上げ、その成立を振り返り、同組織のインターネット上のサイトとツイッターにアップロードされた各種の声明の分析をつうじてその現状を明らかにする。とくに 2013 年 1 月にフランスがマリに軍事介入する直前に AQMI の現指導者アブー・ムサブ・アブドゥルウドゥードが行ったビデオ声明を、北アフリカのイスラーム急進派の基礎研究に必要な資料と判断し、すべて日本語に訳出して資料として付した。

1. AQMI の成立

まず AQMI の成立過程を簡単に整理しておきたい²。アルジェリアで 10 万人以上の犠牲者を出したと推定される武装勢力と体制側の衝突が起こったのは 1990 年代のことであった。それは、1991 年 12 月、アルジェリア立法議会選挙でイスラーム政党である「イスラーム救済戦線」（FIS）の選挙結果が取り消されたことに端を発する。体制を非難するイスラーム主義運動には、大きく分けて二つの潮流ができた。「武装イスラーム運動（MIA）」と、「武装イスラーム集団（GIA）」である。前者は「イスラーム救済軍」（Armée Islamique du Salut）を結成して、敬虔なブルジョワジー層の共感を得たと言われ、FIS の指導部の逮捕により分裂した。後者は、アブドゥルハック・ラヤーダという人物によって創設された組織で、アルジェリア当局との全面戦争を辞さない強硬な姿勢をとった非常に過激な思想をもつ武装集団であった。GIA は都市貧困青年層の共感を得て、やがてさまざまな潮流が合流した。1994 年、ジャマール・ザイトゥーニーが GIA を統制すると、アルジェリア体

制と完全戦争の原則のもと、爆破、石油産地への攻撃、警察、教師、公務員、公共企業の被雇用者を標的とした凄惨なテロ行為を行った。

GIA の行動を教義面から正当化し、現地のジハードと国際的なジハード運動をつなぐ役割を果たしたのは、ロンドンで発行される機関紙『アンサール (al-Anṣār)』であった[ケペル 2006: 350-1]。これを発行したのは、ロンドン在住のシリア人アブー・ムスアブ (Abū Muṣab al-Sūrī) とパレスチナ人アブー・カタダ³ (Abū Qatāda al-Filastīnī) である。この雑誌は GIA の犯行声明を掲載し、もっぱらジハードという観点から GIA の活動を支持した。しかし、ジハードの文脈で語りえない凄惨なテロ事件の連鎖を前にして、1996年6月、『アンサール』は公式声明を出し、ジャマール・ザイトゥーニーに対する支持を撤回し、アイマン・ザワーヒリーのイスラーム・ジハード団、リビア・イスラーム戦闘集団 (GICL) も同様の立場を取った。

1997年にはアンタル・ズーアービリーが GIA の新指導者に任命されるが、同年夏、アルジェ近郊の複数の町で住民 500 名以上が殺害されるテロ事件を起こすと、のちの AQMI の母体となる「ダアワと戦闘のためのサラフィー主義集団」を結成するハサン・ハッターブがここから離脱した。

ハサン・ハッターブ (アブー・ハムザ) は 1997-8 年、「ダアワと戦闘のためのサラフィー主義集団」(GSPC) を設立した。GSPC は 1990 年代末、GIA のヨーロッパおよび北アフリカの組織網を整備し、混迷するアルジェリアの主要な武装集団に成長した。GSPC の主要な指導者は、GIA の幹部で、のちの AQMI の指導者となる人物を含んでいた。そのような人物に、ムフタル・ベルムフタル (ハーリド・アブー・アッバース)⁴、アブドゥルマーリク・ドゥルークディール (アブー・ムスアブ・アブドゥルウドゥード)⁵がいた。

2001年9月11日の米国同時多発テロは、GSPC に少なからぬ影響を残した。アル＝カーイダによる9月11日の攻撃を支持したあと、アルジェリアのジハード主義者のあいだで GSPC への賛同は増加し、GIA の旧地区の再編成が行われた。またイラク攻撃と同盟軍による占領は、グループ内部の強い緊張を再燃させ、イラクのジハード支持派が生まれた。2004年に GSPC の長となった現在の AQMI の指導者アブドゥルマーリク・ドゥルークディール (アブー・ムスアブ・アブドゥルウドゥード) 期に「タウヒードとジハード団」のアブー・ムスアブ・ザルカーウィーとの接触が密になったようである。ザルカーウィーは、イラクのいくつかのジハード主義組織を率いていたが、2004年10月、イブン・ラーディンへの忠誠の誓い⁶を行い、正式にアル＝カーイダの傘下へ入った。このとき「タウヒードとジハード団」から「二大河の地のアル＝カーイダ」へと組織名が変更された。GSPC と「二大河の地のアル＝カーイダ」との関係が表面化したのは、GSPC が、2005年6月、は

じめてアルジェリア国境外でアル=マギーティー (Lemgheity) のモーリタニア軍兵舎を攻撃したときであった。ここで「モーリタニアにおける神の敵に対する彼らのすばらしき軍事行動のためにマグリブのジハード戦士に祝福あれ」という「二大河の地のアル=カーイダ」からのメッセージが届いた[Durand 2011: 29]。これは GSPC がアルジェリア一国内のサラフィー主義組織としてではなく、国際的なジハード主義組織としてザルカーウィーの集団の承認を得たことを示した。

2006 年秋、GSPC はアル=カーイダの傘下に入った。9 月、母体アル=カーイダのナンバー2 であったアイマン・ザワーヒリーは、9 月 11 日を記念するビデオのなかで、GSPC がカーイダの旗を受け入れることを公表したのである[Mokaddem 2010: 163-4; Durand 2011: 32]。ここで、正式に GSPC がアフガニスタンのウサーマ・イブン・ラーディンに対する忠誠の誓いを行ったことが判明した。GSPC の長アブー・ムサブ・アブドゥルウドゥードは、翌年 2007 年 1 月 24 日に声明を出し、GSPC の一切の活動は AQMI の名前のものと行われると宣言した。

AQMI は、アブドゥルウドゥードの直接的指揮のもと、著しく再編成された。AQMI は、GSPC の地区区分を発展させた 4 つの地区の構造をもつ。中央地区、東地区、西地区、南地区である。サハラおよびサーヘル地域の活動範囲は、ほとんどこの「南地区」にあたり、再編成された特徴的な構成要素であった。これはもともと、GSPC の旧第 5 地区 (テベッサ、ビスクラ、ワーディー) と旧第 9 地区 (アグワート、ブーヒール山、ガルディーヤ) を拡大させたものであった。サハラとサーヘルの地区を活動領域とし、マリ (北部)、モーリタニア、ニジェール、ナイジェリアの青年を集める。さらにセネガル、ニジェールに支持細胞を配置するだけでなく、活動の範囲はマグリブ諸国全体にまで及ぶと言われる。ここには「ターリク・イブン・ズィヤード部隊」(Katība Ṭāriq ibn Ziyād) など非常に活発な下部部隊をもっている。2013 年 1 月のアルジェリア人質事件の首謀者といわれるムフタール・ベルムフタールの「覆面部隊 (katība al-mulaththamīn)」は、もともと AQMI の南地区に帰属していた同名の部隊が独立したものだと考えられる。

2. AQMI のメディア

近年のイスラーム急進派組織は、インターネットを用いてその活動の痕跡を残す傾向がある。保坂によれば、「ジハード系組織の大半は非合法であり、それゆえ綱領・声明などの入手は従来、非常に困難であった。1990 年代後半からはさまざまな組織がインターネット上にプレゼンスを維持するようになり、とくに 9.11 以後はオンライン上でのプロパガンダ、声明の発表が一般化してきた」[保坂 2008: 318]。アル=カーイダにとって 1990 年代以降、

広報活動が最重要戦略に位置づけられるようになり、21世紀以降それがインターネットやコンピューターを活用するようになってきたとされる[保坂 2010: 100]。

ケペルは、このようなイスラーム急進派のインターネット上の声明が各地の戦闘員や潜在的なシンパに向けて行われ、彼らに行動の理論的根拠を与えていると述べている。彼もインターネット上の活動の痕跡を指摘してつぎのように言う。「カーイダの名前で、あるいはそれに関して語る主要なイデオログは、インターネット上に、あるいはときに出版された形態で大量の文献資料 (an abundant literature) を公表している。それらのメインターゲットは、戦闘員や潜在的なシンパであるように見える。それらは本質的に言って、宗教的、歴史的、ときにナショナリスト的論点を用いて、行動の理論的根拠を与え、目を見張るような暴力をとまなう政治的目的のための動員という性格を刻印している。カーイダという仮想の組織 (a hypothetical organization) には系統だった海図が欠けているが、これらの文字にされた著述の集合体は、このような現象のアイデンティティにおいてもっとも確固たる要素である」 [Kepel 2008: 3]。

アル=カーイダの傘下の AQMI の場合、それほど活発ではないが、メディアでの広報活動を行っている。

(1) AQMI の広報部門：アンダルス・メディア機構 (Mu'assasa al-Andalus lil-Intāj al-I-lāmī)

このアンダルス・メディア機構は、指導者の演説やキャンプの様子、拘束された人質を撮影したビデオ映像を一般のアップローダを使いウェブ上に公表している⁷。アンダルス・メディアは、フランスのマリ軍事介入後の2013年3月、Andalus_Media という名でツイッター上に公式アカウント⁸を開設した。このアカウントは AQMI の「機関紙」のような役割を果たしており、AQMI 側の動向を知る上では有益な情報源のひとつとなっていた。各種の声明や説教、論考、ビデオ映像などを配信していたものの、同年12月末にアカウント自体が凍結された。ツイッター上で世界各地の報道機関・ジャーナリストから質問を募集し、のちにそれに文面で回答する「仮想の記者会見」を開催するという、斬新な試みもみられた。これらの声明・論考の多くは、AQMI のスポークスマン、アブー・アブドゥルイラーヒ・アフマド・ジャイジャリー (本名アフマド・ダグダーグ)⁹によるものである。現在は公式サイト¹⁰が残るのみであるが、こちらも2013年8月から更新が止まったままである。



【図1】AQMIのtwitterアカウント。指導者の声明、説教を動画やPDFファイルで閲覧することができたが、2013年12月末にアカウント自体が凍結された。

(2) マリ紛争に関するアブー・ムサブ・アブドゥルウドゥードの声明

AQMIの現在の指導者アブー・ムサブ・アブドゥルウドゥードがマリ侵攻の開始前(2012年11月15日)に行った声明が残されている(資料1を参照)¹¹。この声明がヒジュラ暦(イスラーム暦)の元日(ムハッラム月1日)に合わせて行われていることから、組織にとってこの声明がとくに重要性の高いものだということが推察される。動画は全長26分11秒である。アブー・ムサブ・アブドゥルウドゥードのアラビア語による独演が主であるが、主張を裏付けるために、ところどころにテレビのドキュメンタリー映像やニュースの抜粋が挿入されている。AQMIの翻訳部門フルサーン・バラグ・メディア(Fursān al-Balāgh lil-Iḳlām)が作製したフランス語と英語の字幕付きのバージョンも存在する(今回の日本語訳でも参照にした)。声明自体は、その語彙や文章構成の特徴から、アブー・ムサブ・アブドゥルウドゥード自身ではなく、AQMIのスポークスマンである、アブー・アブドゥルイラーヒ・アフマド・ジャイジャリーが作製したものである可能性が高い。

① AQMIの世界観

まず彼らは自分たちで想定する敵を「十字軍(al-ṣalībi/al-ṣalībīya)」と呼んでいることに注意を引かれる。歴史的な十字軍とは、11世紀から13世紀後半にかけて約8回にわたって行われたキリスト教徒による聖地回復のための遠征である。その起源は、1095年教皇ウルバヌス2世がクレルモン公会議でこの遠征をキリスト教徒に訴えかけたことだとされ、十字架が戦士の標識と定められた。声明では、宗教間の戦争をイメージさせる「十字軍」という言葉を現代に拡大し、ヨーロッパ植民地主義やシオニズムのイメージと重ね合わせ、アメリカ、フランスを含む西洋、シオニストと結びつけて用いられている。このようなレトリックは、アル=カーイダの創設者であったウサーマ・イブン・ラーディンやエジプト

のジハード団など、他のイスラーム急進派のあいだでも採用されている。

「十字軍」という言葉は声明中 10 回使われている。その用例は、「フランス十字軍 (Firansā al-ṣalībiya)」(計 2 回)、「西洋十字軍 (al-gharb al-ṣalībī)」(計 2 回)、「シオニスト十字軍 (al-ṣafyu-ṣalībiya)」(計 2 回) である。また「マリに対する外国の侵略者」の意味で用いられている箇所が 2 つある。彼らの敵である「十字軍」は、直接的にはフランス、西洋、シオニストを指すが、文脈から考えて国連やアフリカ諸国が派遣する部隊も含まれる。ここでは「イスラーム (正確には、AQMI とその同盟者のみを範囲とする) 対キリスト教的西洋・シオニスト (およびそれを支持する諸国家)」という単純な二項対立的な世界観が成立している。

② 「十字軍」に対峙する自己イメージ

「十字軍」の侵攻に対して彼ら自身は、不当に抑圧されたイスラーム共同体 (ウンマ)、その宗教と土地を防衛・解放するムジャーヒディーン (ジハード戦士) という自己イメージをもっている。声明のはじめの呼びかけは、世界中「あらゆる場所 (fī kull makān) にいる私のムスリム同胞」に向けて行われている。声明の向こうに世界のムスリム、とくにジハード主義者の眼があることが意識されているのであろう。このウンマは、彼らの表現によれば「ひとつの身体 (al-jasad al-wāḥid)」に等しい有機体である¹²。AQMI は「防衛のためのジハード」を原則とすると述べる。声明によればその目標は「シオニスト十字軍の同盟を攻撃の対象とすることをとおして、自分たちの宗教、自分たちのウンマの利益を防衛すること」である。その一方で、自分たちが外部からの攻撃を受けた場合、「自己防衛」として報復を加えることが示唆されている。

③ マリ紛争に関して

AQMI はマリ紛争を「フランスによる不正な代理戦争」と呼び、フランスが介入する権利を有しないとみなす。彼らの認識によれば、マリは紛れもなく「イスラームのウンマ」の一部をなす。マリの問題は、当事者であるマリの内政問題であり、西洋 (「十字軍」) による介入なしに、ムスリム同士の調停により解決が可能である。マリとその人民の統一を達成する [唯一の] 手段は「イスラーム的企図 (al-mashrū‘ al-islāmī)」を用いることである。イスラーム的企図が具体的に何を指すかは不明だが、彼らが再三主張する「シャリーアによる裁決」も含まれるのであろう。この点でマリ北部を実効支配し、シャリーア適用したイスラーム国家の樹立を図ったアンサール・ディーンへの支持を直接要請していることは重要である。

声明での表現によれば、フランスによるマリの軍事介入は、パレスチナ、イラク、アフガニスタン、ソマリアにつづいて「シオニスト十字軍がムスリムの土地に対して行う侵略

の連鎖の新たな輪」である。フランスが介入する動機は、サハラ、サーヘル地域の諸国家が所有する天然資源を獲得（「略奪」）することにほかならない。ここで彼らは、ニジェールのウラニウムと石油、マリや周辺諸国の金とダイヤモンド、コートジボワールのカカオを例示する。AQMI の認識では、マリにおけるフランスの軍事的影響力の存在は、これらの物質的利益を目当てにしたものである。またフランスの軍事行動は、オランダ大統領の個人的・政治的打算によるものであると非難され、軍事介入の遂行は自国民の犠牲を増やし、ひいては経済的凋落を生むと指摘されている。

最後に声明は、フランスとアフリカの政治指導者へ向けたメッセージで締めくくられる。これらの指導者が戦争を望むのであれば、AQMI 側はこれに「神の力をもって」耐え忍び、そして勝利するであろうと断言される。またアフリカの諸国家の脆弱性を「ガラス」と表現しており、その脆いガラスを攻撃によって破壊することがほめかされている。彼らは「自己防衛」のためには大国およびアフリカ周辺諸国との戦闘も辞さない態度をとっていることがここから明らかである。



【図 2】マリの戦争に関する、AQMI の指揮官、アブー・ムサブ・アブドゥルウドゥードによる声明（「マリ侵攻：フランスによる代理戦争」2012 年 11 月）。もともと AQMI のメディア部門、Mu'assasa al-Andalus が制作したビデオである（フルサーン・バラグと呼ばれるジハード主義者支援グループによる英語訳版、仏語版もある）。

おわりに

本報告は、AQMI の成立過程を振り返り、これまで空白となっていた AQMI の行動の「内在的論理」を、組織の声明の翻訳・分析をとおして「実証」することを試みたものである。報告内で参照にしたケペルや保坂らの指摘からもわかるようにウェブ上に残された無数の痕跡は、イスラーム急進派の動態を把握するには欠かすことができない。サハラ、サーヘル地域と密接に関連した北アフリカにおけるイスラーム急進派に関する研究は、我が国では蓄積がなく、邦語で接近できる基礎資料を整備・作成することは急務である。本報告で

確認されたとおり、AQMI の思想は、それ自体で独自性をもつものではなく、アル＝カーイダをはじめとするその他のジハード主義組織の主張と根本的には大差ない。しかしジハード主義的思想をもとに、当該地域の国際的・内政的な環境を取り込み、新たな形態で表現している点で地域固有の特徴を有する。急進派の伸長と台頭を考える場合、これらの思想と、構造的・政治的・経済的要因とを加味しなければならないであろう。

資料 1

マリ紛争に関する AQMI 指揮官アブー・ムスアブ・アブドゥルウドゥードの声明

「マリ侵攻はフランスによる代理戦争である」(2012 年 11 月 15 日/1434 年ムハッラム月 1 日付)

あらゆる場所の私のムスリム同胞よ、汝らに平安と神の恩寵あれ。

このスピーチは、フランスと西洋十字軍がアフリカのサーヘル地方における代理戦争 (al-ḥarb bil-wakāla) の〔開始を告げる〕太鼓を鳴らし始めたときに行われた。それは、子ども、女、ムスリム・シリア人民たちに対して、罪深きシリア政権が犯した大虐殺をやめよう国際連合の決議¹³が発出されたのと時を同じくしている。この重要な時期に安全保障理事会は決議 2071¹⁴を発行した。それはムスリムの土地であるマリへの侵攻に青信号〔許可〕を与えるものである。マリは貧しい国である。その人民は、自分たちの富を略奪する西洋十字軍を原因とする、すでに貧困・窮乏・剥奪に苦しんでいる。この不正の決議は、略奪に加え、パレスチナ、イラク、アフガニスタン、ソマリアの占領につづく、直接的で冷酷な占領を行うためのものである。これは、シオニスト十字軍がムスリムの土地に対して行う侵略の連鎖のうちの新たな輪である。それは、ダブル・スタンダードと不正な政策に基づく、グローバルな無法地帯の特質を明らかにしている。それは、弱者に対する強硬な措置であり、被抑圧者に対する専制である。この類似した時間に会議の速度が早められ、動員と会合が増大していると、想像する者、あるいは心に抱く者にとって、国連と安全保障理事会、ヨーロッパ連合、アフリカ連合の会合が開催されることであろう。虐殺者バッシャー・[・アサド] を転覆させるのではなく、また包囲された私たちのガザの人民に対するイスラエルの継続的な犯罪行為を追放するのでもない。彼らの主張によれば、ヨーロッパからわずか 3,000 km の場所で、シャリーアがムスリムを裁決するという、差し迫ったイスラームによる危機を防ぐという口実のもと、マリに侵攻するのである。いと至高なる我々の主がつぎのように言われたとき、彼は真実を言い当てている。「彼らは可能ならば、汝らを汝らの宗教から背かせるまで、汝らと争うことを止めぬであろう」(クルアーン第 2 章 217 節)。

抑圧されたムスリムたちよ、フランスに富を略奪されたアフリカ人よ、すべての人びとのあいだに公正を確立することを切望する、世界の自由の民よ、私たちは重要な歴史的瞬間の前にいる。それはふたたび嘘が世界中に循環し、邪悪な詐欺の手法が再生産されるところである。私たちは、しばらくのあいだ、イラク侵攻の前の日々の記憶をたどってみよう。それは、戦争の動員のために、[ジョージ・W・] ブッシュとコリン・パウエル〔元米国務長官〕が推奨した、アメリカの最大の嘘を思い出すためである。あなた方は記憶され

ているだろうか。それは、化学兵器が存在し、サッダーム〔・フサイン〕がアル＝カーイダとザルカーウィーに密接な関係があるという嘘である。今日、フランス十字軍は、その戦争を正当化するために、アメリカと同じ口実を繰り返し、下劣で疑わしき役割をふたたび果たそうとしている。〔フランスのローラン・ファビウス〕外務大臣は、マリ侵攻のため世界中を動員しようとあちこち急ぎまわっている。それは、不正の戦争を正当化するという嘘を捏造するという手段によっている。それはフランスがあらゆる〔国〕に強制したものである。その筆頭には、アフリカ人とサーヘル諸国家がある。〔フランソワ・〕オランダ〔仏大統領〕は嘘をつき、AQMIを〔フランス〕内政の失策をかけるコート掛け〔shammāa口実〕とした。そしてその背後に危険で壊滅的な目的を隠蔽した。それはマリの占領・分割・破壊を超えるものである。それは爆発性の破片を地域の近隣諸国に不可避的に到達させる。

〔ここでフランスの軍事介入に関するアラビア語のニュース映像が挿入される〕

私たちは、フランスがどのようにして威圧的な政策を追及しているのかをフランスのメディアをとおして見聞きしている。どのようにして世界に、アフリカ人に、そしてフランスの人民に対して嘘をついているのか、何百人というフランス人とアラブ人ムジャーヒディーンがマリに集結し、そのあとフランスを襲うために帰国し、アフリカを侵略するために各地に散らばっていると言って彼らを欺いているのか。それは、ブッシュにはじまり、〔ムアンマル・〕カッザーフィー、バッシュャールを経て、最後にオランダに至る、圧制者がいつも用いる同じ口実である。歴史的責任と事実を明らかにし、重要な点を文字に残しておくため、私はこのスピーチにおいて、いくつかの集団に向けて、多くのメッセージを送りたい。

第1のメッセージ：

私はこの戦争の隠蔽された目的と、真の理由を暴露したい。フランスがこの〔サーヘル〕地域の人民の代理人としてそれを強制的に押し付けようとするものである。それはムスリムとアフリカ住民の富をこれまで以上の略奪する保証〔を得るため〕に行われる。ニジェールの抑圧された困窮者の汗が混じったウラニウムと石油を、適正な価格ではないまま、フランスの諸工場に継続的に流出させるということである。またそれは、マリやその周辺諸国の金とダイヤモンドの富を〔獲得することを〕目的としている。その一方でマリの人民は最低賃金で彼らに略奪され、貧困と剥奪という泥沼にはまったままである。またそれ

は、コートジボワールのカカオ・プランテーションで奴隷にされる、マリの子どもたちの涙が入り混じったチョコレートヨーロッパの子どもたちが味わうことができるようにするためである。

〔ここでコートジボワールのプランテーションで働く子どものドキュメンタリー番組の映像の抜粋が挿入される〕

これと並行して、フランスの意識の深層に根づく、十字軍の黒い憎悪が存在する。私たちの預言者を攻撃する風刺漫画を出版して私たちの預言者の名誉（彼のうえに平安あれ）を侵害し、フランスにおいてムスリム女性がニカーブを着用する個人的権利を〔享受することを〕禁じ、その土地のムスリムに苦痛を与えた。それは、住民のほぼ90パーセントを占める〔マリの〕ムスリムが自国で自分たちのシャリーアとイスラームに固守した生活を送るのを禁ずるために、今日、戦争の動員へと導いているのと同じ憎悪である。ごく簡単に言えば、それはフランスによる不正な代理戦争である。それは、イスラームとムスリムに対する十字軍的憎悪が混じった、物質的な欲望に動機づけられている。その目的を果たすため、フランスは〔マリに〕介入し、軍事的プレゼンスをもつことを熱望している。それは、マリ北部において継続的・持続的であるだろう。もしそれが成功すれば、それだけで〔終わること〕はなく、〔今後の展開の〕第一歩である。神がお望みなら、それは成功しないが。それは、残りの邪悪な陰謀を完成させるための、トロイの木馬となるであろう。その〔陰謀〕は、地域紛争の栄養摂取に依存している。それはすでに分割されているものを分割することを奨励し、マリだけでなく、そのすべての近隣諸国を、災禍、戦争、分割で脅かすものである。私たちはスーダンの分割を忘れたわけではない。

第2のメッセージ：

私は再確認したい。アル=カーイダ組織は、これまでマリや周辺諸国、アフリカ人に脅威を与えたわけではなく、今後もそうではない。フランスは嘘をつき、そう主張している。ムジャーヒディーンは、明確な目標をもつ。それは、シオニスト十字軍の同盟を攻撃の対象とすることをおして、自分たちの宗教、自分たちのウンマの利益を防衛することである。それはムスリムの土地の占領と、ムスリムの諸問題への干渉をやめさせるためである。周辺諸国やアフリカ人は、私たちが自己防衛する場合をのぞき、私たちの攻撃の対象ではない。これらの国々の指導者たちは、自分たちのものではない戦争に巻き込まれるべきではない。また他の失敗から教訓を得るべきである。彼らは知るべきである。フランスが、

彼らの利益ではなく、自国の利益を望んでいることを。フランスが自国、その兵士、その人民が、ホロコーストの燃料となることを望んでいるということ。その火花は彼らの首都にまで到達するであろう。その一方でフランスの人民は安全な場所で、遠く離れた海の向こうの塹壕に隠れながらアフリカ人の富を享受する。彼らが自国と自国民の利益を獲得するのを本当に望むならば、私がオランダを支持しないよう、その指導者たちに忠告するのはこのためである。つぎの格言から教訓を得よ。「汝らの馬がガラスでできているならば、他人に石を投げるべからず」。コートジボワールの馬がガラスでできていることは周知のとおりである。セネガル、モーリタニア、ニジェールの馬も同じである。私たちとしては、これらの馬に石を投げることを望んでいない。彼らの石が私たちに届いた場合は別である。そうなれば、私たちは彼らの脆いガラスの馬に石を投げざるをえない。

第3のメッセージ：

自分たちの宗教と由緒あるイスラーム文明を誇りとする、マリのムスリム人民へ。私たちは彼らにつぎのように述べよう。諸君らの国における古く新しい問題は、ムスリム同士の内的問題である。それは一滴の血も流すことなく、ムスリム自身同士の和解をとおして国内的に解決しうる。諸君の国のすべての智者、高貴な者、名士 (a'yān balad-kum) はそれを確信しており、それは成し遂げられることを知っている。そうであれば外部の不信仰者 (al-kuffār) と諸君の国とのあいだに何の関係があるのだろうか。十字軍侵略者とムスリムの問題に何の関係があるのだろうか。ムスリムの血が入り混じった、より多くの石油への欲望でないとすれば、ムスリムたちの利益を望む、無実の民の血を流させる者たちと石油戦争の商人からなる地球規模の高慢さと専制の大国はいつ起こったのであろうか？ フランスがマリの統一を望むと主張するとき、諸君らに嘘をついている。すべての証拠は正反対であることを示している。国の分割がそのもっとも大きい熱望であることを確証している。彼らは、マリ北部を支配することを可能にし、独立国家を樹立するために、アザワード解放運動を支持した者たちではなかったか。しかし、神に称えあれ。諸君らのムジャーヒーディーンの兄弟、[マリ] 北部のイスラーム主義者の子どもたちは、邪悪な企図を粉々にし、悪い陰謀を台無しにした者であった。今日、フランスは同じ企てをふたたび行おうとしている。はじめに軍事的介入を行い、つぎに北部を恒常的にその代理者に支配させて分割するというねじれたやり方によってである。しかしこれは果たされぬであろう。

マリのムスリム同胞よ、マリの統一、[マリ] 人民の統一の真の保証となるのは、イスラーム的企図 (al-mashrū al-Islāmī) である。それは分割を防ぎ、流血の惨事を阻止し、公正を達成し、権利を回復させ、諸君らの人民のすべての党派 (kull al-ṭawā'if) を呼び集め

るものである。フランス十字軍が推進し、諸君らにとって破滅と大損害、災難をもたらすだけである世界規模の高慢な大国と軍事的干渉から離れて、今日、唯一のムスリムの人民、唯一の宗教を〔信奉する〕ムスリム同胞のあいだで、この企図に関する相互理解と合意に到達するための絶好の機会である。この機会を見逃さないようにせよ。全精力を傾けてこれを支持せよ。ここで、私は、私たちのマリ南部の人びとに謝意を申し上げる。彼らの多くの青年が自分たちの宗教と土地に熱心であり、そこで成長し、イスラームを防衛するためにムジャーヒディーン¹⁵の隊列に加わり、この地を占領しようとする侵略者たちを追放するのに協力している。つぎに私はマリのムスリム人民に呼びかける。ウラマー（学者）、教宣者、青年、名士、高貴な人びと、知識人、すべての部族を育てよ。それは、同胞であるアンサール・ディーン¹⁵の運動を手を取り合って支援し、イスラーム的企図を保護するためである。それは彼らとの相互理解に到達し、分割から国を救うために首尾一貫した隊列を形成するためである。国の利益、人民の利益に何の関心ももたない、潜伏する者たちから機会を取り上げるためである。彼ら〔ムスリム〕にとって首尾一貫した隊列は、不浸透性の防壁を望まれる神である。それは、見込まれる外国の十字軍による侵略を防ぎ、その隠れ場の覆いを一掃するであろう。私は、あらゆる場所にいるムスリムに呼びかける。マリの自分たちの同胞を支援し、あらゆる種類の支援と援助を提供せよ。ムスリムにとってムスリムは兄弟であり、信徒たちはひとつの身体と同じ存在だからである。

第4のメッセージ：

それは私がアフリカの人民に送るメッセージである。私は彼らにつぎのようなことを明らかにしたい。アル=カーイダおよびムジャーヒディーンと尊大な西洋との戦闘は、ムスリムの利益を防衛することだけを目的とするわけではない。それは全世界の被抑圧者と弱き人びとを防衛することを目的とする。彼らは全人類の不正に抵抗する者たちである。とくに、苦痛と悲惨な出来事を対価として、西洋文明を構築するため、西洋の奴隷となり、大洋を超えて鎖で縛られて連行されるアフリカ人〔の不正〕に対してである。私たちは、諸君らが西洋の覇権から解放され、束縛から脱することを望んでいる。なぜなら、私たちの目標は、奴隷を崇めている奴隷を解放し、奴隷の主〔=神〕を崇めさせることだからである。私たちはまたこう望んでいる。正義がすべての人民のあいだに浸透すること。というのも、黒人と白人との差異は、信仰心をのぞいて、存在しないからである。〔西洋は〕諸君らの富を略奪し、諸君らの子どもたちの貧困と困窮を対価として自国民の幸福を築く。西洋に対するムジャーヒディーン¹⁵の勝利は、本質的には、アフリカの人民に対する勝利であり、もっとも大きな利益である。

第5のメッセージ：

私はそれをフランスの人民に送る。その内容は以下のとおりである。支持率が低いオランダは、内政の失敗を逃避の政策をとおして隠そうとしている。こうすることでオランダはこれまでのアフガニスタン〔介入〕以上に諸君らを巻き込もうとしている。オランダより前のブッシュは、同じことを行ったが、うまく行かず敗れた。オランダは諸君らの安全、利益、諸君らの子どもの生命をこれまでのどのとき以上に危険にさらそうとしている。経済学者に尋ねるがよい。「アフガニスタン、イラク、ソマリアにおいて西洋の政治家が行ったムスリムに対する戦争は、ヨーロッパの幸福を増進させたのか。それとも破綻の脅威をつきつける先例のない経済危機へと陥れたのか、と」

〔ここで米国の対テロ戦争のコストに関するアラビア語ニュースの抜粋が挿入される〕

アフガニスタンで殺されたフランス人兵士の母親たちに尋ねるがよい。「サルコジによる戦争参加の決定は賢明であったのか。それともその結末はフランスにとって災いと損害であったのか、と」

〔ここでフランス兵士の遺族のフランス語のインタビュー映像が挿入される〕

諸君らの賢者がその決定が誤りであったと合意しているのであれば、近日中にサーヘルにおいて戦争を開始するオランダの決定は、サルコジの過ちよりも悪いものになるということを知るがよい。そのコストはより高くなるということを知るがよい。フランスの国益の維持は、フランスを攻撃の対象とさせる理由と政策という手段のみによる。

フランスの国益は、オランダの戦争のコストよりもはるかに低い容易な方法を用いる賢明な政治家によってのみ保護されうる。彼らは正しい方向を向くだけでよい。革命を起こした祖先がなしたのと同じようなイニシアチヴを取るがよい。諸君らを敗北の戦争へと巻き込むことで自分の過ちを隠そうとする、その不出来の大統領を阻止し、転覆するには手遅れである。そのもっとも重要な特徴には、私たちの問題においてこれまで以上の正当性をあたえ、私たちに対してこれまで以上の共感を生み出し、私たちに諸君らの利益を攻撃するための決然とした態度をとらせることである。生命にかかわる利益はたくさんある。それは、今日に至るまで、サーヘルの諸国家を攻撃の対象とはしていないことである。私はここで、誘拐されたフランス人の家族に対して重要な確認を〔与えることを〕忘れることはできない。諸君らのオランダ大統領は、諸君らの子どもたちの問題に関して矛盾し、

諸君らをばかにしている。オランダは彼らを救出するために行動していると宣言する一方で、地上においては軍事的介入と秘密裏の軍事行動を主張することで墓穴を掘り、彼らの重荷を下ろさせようとする。私は諸君らに忠告する。公に、そしてメディアにおいて迅速に動くように、と。それは、この大統領が、自分の個人的・政治的打算のために犠牲とする諸君らの子どもたちを救うためである。しかしもし誘拐された人たちが自分の親族であったならば、オランダはまったく異なった方法でこの問題を扱ったことであろう。

最後のメッセージ：

この不正な戦争のために〔軍を〕動員し、それを主張するすべての者に対して、私はそれを送ろう。その筆頭は、フランスの大統領と、彼を支持するサーヘル地方の国々のいくつかのアフリカの指導者である。私は彼らにつぎのように言おう。諸君らが自分たちの土地、サーヘルの土地、その周辺地域の平和と安全を望むのであれば、私たちはそれを歓迎しよう。諸君らがそれを戦争の地にしたいと望むのであれば、私たちは諸君らの要望に応えよう。サハラ砂漠は、神がお望みであれば、諸君らの兵士の墓となり、カネの浪費の場となるであろう。私たちは、そこに育ち、十分な経験を積んだ、戦争の男である。それは、この類の戦争において私たちに勝利を可能にさせる。

私たちは諸君らに知らせを伝えよう。私たちは非常に忍耐強い。私たちは、猟銃と少ない機関銃を用いて20年間、〔アルジェリア政権との〕戦争に従事してきた。しかし今日、神は私たちに武器、弾薬、熱烈な青年という大きな工廠を与えた。私たちは激しい攻撃に応じ、1世紀にわたったとしてもそれに抵抗することができる。私たちとしては、それが長期的な戦争になることを望んでいる。それは、諸君らを消耗させ、経済的・政治的危機を深くするからである。それ以上に、私たちはその破片が私たちに対する攻撃に加担する、すべての脆いガラスの馬へ到達することを望んでいる。それは彼らを粉砕するためである。私たちはイスラームのための聖なる戦争として、その土地を防衛するために、それと闘うであろう。全能者から彼の信仰する下僕へ〔贈られる〕勝利を確信して、我が主の支援を探し求めながら。アメリカと、アフガニスタンとイラクにおけるアメリカの従僕を敗北させた者たちは、フランスと、サハラにおけるフランスの代理人を敗北させることが出来る〔確信して〕サハラの焼けつくような砂のなかに彼らを追い込むであろう。

諸君らがそれを戦争の地にしたいと望むのであれば、私たちは受けて立ち、神の力を用いてそれに打ち勝つであろう。神は、その書〔クルアーン〕のなかでつぎのように言われた。「神と出会ったと考える者たちは言った。神の御許しのもと、何度も数の少ない集団が大きい集団を負かした。神は耐え忍ぶ者とともにおられる」（クルアーン第2章249節）。

(翻訳・了)

参考文献

- エスポズィート、ジョン・L (塩尻和子・杉山香織) 2004. 『グローバル・テロリズムとイスラーム：穢れた聖戦』明石書店.
- 大塚和夫ほか編 2002. 『岩波イスラーム辞典』岩波書店.
- 私市正年 2004. 『北アフリカ・イスラーム主義運動の歴史』白水社.
- ケペル、ジル (丸岡高弘訳) 2006. 『ジハード：イスラーム主義の発展と衰退』産業図書.
- 保坂修司 2005. 「乗り遅れた聖戦士：ザルカーウィー神話の解説」『世界』(735) .
- 2008. 「イスラーム急進派」小杉泰ほか編『イスラーム世界研究マニュアル』名古屋大学出版会.
- 2010. 「アフガニスタンにおけるカーイダの現状」保坂修司編『アフガニスタンは今どうなっているのか』京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科付属イスラーム地域研究センター (KIAS) .
- 渡邊祥子 2012. 「マグレブの AQMI とその射程：「アラブの春」とサヘルをめぐる」『アジア研ワールドトレンド』(205) .
- Durand, Gwendal 2011. *L'Organisation d'Al-Qaïda au Maghreb Islamique : Réalité ou manipulations ?* Paris : L'Harmattan.
- Guidere, Mathieu & Nicole Morgan 2007. *Le Manuel de recrutement d'Al-Qaïda*. Paris : Editions du Seuil.
- Hosaka Shuji 2012. “Media Strategies of Radical Jihadist Organizations: A Case Study of Non-Somali Media of al-Shabaab,” *Kyoto Bulletin of Islamic Area Studies*, 5-1&2 (February 2012), pp. 3–25.
- Kepel, Gilles & Jean –Pierre Milelli (ed.) 2008. *Al Qaeda in Its Own Words*. Tr. Pascale Ghazaleh. Cambridge, Mass. & London: The Belknap Press of Harvard University Press.
- Mohamed, Mokaddem 2010. *Al-Qaïda au Maghreb Islamique: contrebande au nom de l'Islam*. Paris : L'Harmattan.
- UN 2013. “The List established and maintained by the 1267 Committee with respect to individuals, groups, undertakings and other entities associated with Al-Qaida,” (last updated on 6 August 2013)
- http://www.un.org/sc/committees/1267/aq_sanctions_list.shtml

－注－

- ¹ Tan·īm al-Qā·ida bi-Bilād al-Maghrib al-Islāmī (英語では Al Qaeda in the Islamic Maghrib(AQIM)、フランス語では Al Qaīda au Maghreb Islamique (AQMI)などと表記される。本稿では、フランス語式の略表記を用いた)。母体であるアル＝カーイダ(アラビア語で「基地」の意味)は、ウサーマ・イブン・ラーディンが創設した組織であるが、やがて彼に「忠誠の誓い」を行って、アル＝カーイダという看板を用いた傘下のジハード組織が各地に成立した。このような組織には、「マグリブ・イスラーム諸国のアル＝カーイダ」のほか、「アラビア半島のアル＝カーイダ」、「両大河の地のアル＝カーイダ(イラクのアル＝カーイダ)」などがある。
- ² 邦語ではジル・ケペル[2006]と私市[2004]がアルジェリアのイスラーム急進派・武装闘争派の展開を詳述している。
- ³ Abū Qatāda al-Filastīnī. ヨルダン出身。ロンドンに亡命。当地で『アンサール(支援者)]を発行し、GIAのジハードを正当化する役割を担う。サラフィー・ジハード主義のイデオログ。「カーイダのムフティー(法学的裁定の発出者)」とも言われる[ケペル 2006: 360-1]。国連・アル＝カーイダ制裁リスト(QI.M.31.01.)を参照にせよ。
- ⁴ Mukhtār Belmuekhtār. アルジェリア・ガルディーヤ出身。国連・アル＝カーイダ制裁リスト(QI.B.136.03)を参照にせよ。
- ⁵ Abd al-Mālik Drūkdāl (Abū Mus‘ab ‘Abd al-Wudūd) アルジェリア・ブリーダ出身。国連・アル＝カーイダ制裁リスト(QI.D.232.07)を参照にせよ。
- ⁶ mubāya‘a (bay‘a) 忠誠の誓い。臣従の誓い。イスラーム政治思想において、統治者と被統治者とのあいだの統治委任の契約を成立させる重要な形式。スーフイズムにおいては師弟の誓いおよびその儀式、タリーカ(スーフイー集団)への入団儀式を兼ねる。イブン・ラーディンに忠誠の誓いを行うことは、カーイダの傘下に入ることを意味する。(大塚和夫ほか編『岩波イスラーム辞典』、s.v.「バイア」(小杉泰および東長靖)。
- ⁷ 米国カリフォルニア州に本部を置くインターネット・アーカイブ(The Internet Archive)という非営利団体が運営するデジタル・ライブラリーには、アンダルス・メディア機構の作製した声明・ビデオ映像が過去のものも含めて無数にアップロードされている。同団体の URL は <https://archive.org/> である。
https://twitter.com/Andalus_Media. (最終閲覧 2013 年 12 月 18 日)
- ⁸ <http://andalus-media.blogspot.jp/> (最終閲覧 2013 年 12 月 18 日)
- ⁹ Abū ‘Abd al-Ilāhi Aḥmad al-Jayjalī. アルジェリア・ジャイジャール県出身。国連・アル＝カーイダ制裁リスト(QI. D. 252. 08)を参照にせよ。
- ¹⁰ 先述のインターネット・アーカイブ上で確認される声明。フラサーン・バラグ・メディア(Fursān al-Balāgh lil-I‘lām)というジハード支援グループの英語訳、仏語訳を字幕で付したバージョンも見られる。
- ¹¹ AQMIのスポークスマン、ジャイジャリーは、ツイッター上で行った質疑応答のなかで、ムスリムは「ひとつの身体の如き(ka jasad wāhid)」であるという言葉を用いて彼らの防衛ジハードの世界観を表現している。それによれば「私たちは、[ナイジェリア]ラゴスから[インドネシア]ジャカルタに至るまで、単一のウンマ(al-umma al-wāhida)である。私たち[ムスリム]の土地(ard-nā)のごくわずかな部分(shibr)でも侵略する者は、私たち[ムスリム]の土地すべてを侵略する者[と同じ]である。1名のムスリムを虐げることは、あたかも全ムスリムを虐げ、侵略すること[と同じ]である」Abū ‘Abd al-Ilāhi Ahmad al-Jayjalī, “Rābi· li-Tahmīl ajwaba al-liqā’ al-sahfī ma‘a al-Shaykh Ahmad Abū ‘Abd al-Ilāhi -hafaza-hu Allāh,” updated on 18 April 2013. (現在ツイッターのアカウントは凍結されており、この資料を閲覧することはできない。資料のコピーは筆者が所蔵している)。
- ¹² 国連安全保障理事会決議第2042号および第2043号(2012年)のことか。このなかで安保理は、シリア国連監視団の設立の意図を表明し、先遣隊を展開することを決定した。
- ¹³ 国連安全保障理事会決議第2071号(2012年)。2012年10月12日(第6846会合)に国連安全保障理事会が全会一致で採択。武装勢力に対して北部マリでの人権侵害を止めるよう要請したもの。
- ¹⁴ Ansār al-Dīn. マリ北部のキダル出身のイーヤード・アグ・ガーリー(Īyād Agh ghālī)が2011年12月に設立。マリ北部のトゥアレグの分離独立を目指したイスラーム主義運動。